

がん哲学外来記念『ダイヤモンド・プリンセスクルーズ』に寄せて

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授 / 国際教養学部 教授 樋野 興夫

2018年連休の始まりに(4月28日～5月2日)、『ショートクルーズ』(横浜港～釜山見学～神戸港～姫路城観光～神戸空港～羽田空港:5日間の旅)に招かれた。4月28日朝日新聞夕刊でも、クルーズ三隻が紹介されていた。英国船籍のダイヤモンド・プリンセス(約11万6千トン、290m、乗客定員約2,700人)の船内で『がん哲学～人生ピンチヒッター』(4月29日10:30～12:00am)と『がん哲学～空っぽの器～』(5月1日9:30～11:45am)の2回の講演(カフェも開催)の機会が与えられた。多数の聴講者、質問もあり大変有意義な時であった。朝食、昼食、夕食も皆様との楽しい一時であった。釜山市内観光(梵魚寺、国際市場、チャガルチ市場)と船上からの夜の釜山港の景色は最高であった。スケールの大きい姫路城(別名白鷺城)の観光も千姫をはじめ、多くの歴史の復習であった。

人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして傷害時における全体的な「いたわり」の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。すべての始まりは「人材」である。「目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし」・「最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである」(新渡戸稲造)の教訓が、今回のクルーズの旅で鮮明に甦った。

①世界の動向を見極めつつ歴史を通して今を見ていく ②「理念を持って現実に向かい、現実の中に理念」を問う人材の育成 ③複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」の種蒔き
クルーズは私もwifeも初めての経験であった。星野夫妻、牧野ゆき子様、森本和慈様、津原豊子様、森尚子様、岩崎秀子様、小林夫妻、添乗員の高橋様には本当にお世話になった。「クルーズ友の会」発足の予感がする。



「クルーズ」の思い出

クリスチャンアカデミー in JAPAN 校長 樋野ジーン

Family and friends help to make sweet memories. April 28 to May 2, I was able to go on the Diamond Princess cruise from Yokohama to Busan to Kobe. This was an opportunity to make new friends and many wonderful memories.

My husband, Okio, gave two lectures about cancer philosophy and two very short and simple cafes were held. About 50 people attended each of the lectures. Nine of us were traveling as a group. So 40 other guests on the cruise joined the lectures and cafes. The nine members of our group were able to enjoy delicious food and conversations. Watching The Greatest Showman under the stars was one of my favorite memories. Our stateroom faced the rainbow bridge in Busan so we were able to see it lit up and the moon shining down, that was one of my favorite views.

Disconnecting from email, internet and social media was also something I enjoyed. Being present and having the other people with me present and not distracted was a delightful advantage of being on a ship. The Diamond Princess staff is very international and some of the staff speak Japanese. This was a short cruise during Golden Week, most of the guests on board were Japanese. Since I was with a Japanese tour group, all of our explanations and papers were in Japanese. Each evening I would ask for the English menu. On the final evening I realized that I was probably the only non-Japanese at our seating in the dining room. That evening there was a parade for the baked Alaska and introductions of the chief chef and maitre`d, it was ALL in Japanese. Usually the announcements were made in English and then a Japanese translation. I look forward to my next opportunity to travel with a group from Cancer Philosophy clinics/medical cafes.

「船上の空っぽの器」

目白カフェ 森 尚子

初クルージングの私は、期待と不安で乗船しました。2700人の乗客、1200人のスタッフを乗せて進むダイヤモンドプリンセスは、まるで海の中の小さな町です。

カフェの予定は2回。船内にたくさんのイベントがある中で、はたしてどれ位の方がいらして下さるのか心配でした。けれども、合計100人近くの方がいらしていただきました。

テーブルでは、いろいろな地域からのがん患者さん、ご家族、ご遺族、医療者とご一緒しました。樋野先生のお話に感銘を受けたという方、がん哲学外来カフェを初めて知って方、涙を流して胸の内を語られた方。先生への質問も活発でした。「帰ったらネットで検索するね」「近くのカフェに必ず行きます」「話せて良かった」「聞いてくれてありがとう」と、皆さん笑顔で会場を後にされました。

病気も単なる個性。小さなことに大きな愛を込めて、寄り添う対話の場。船上のがん哲学外来カフェは、参加した皆の良き思い出となりました。

「がん哲学～空っぽの器～」

OCCカフェ ファシリテーター 森本 和滋

本クルーズ第2回目「がんカフェ」は5月1日午前9時半に開催された。40分間講演後の9件の質問にも樋野先生は丁寧にお答えになり、頷きながらメモを取っておられる方も多かった。最近某学会の要職に就いた当方には、「空っぽの器とは、底の抜けないしっかりした器を用意して、注がれた水を喜んで受けること」時宜にかなった処方箋でした。

引き続きカフェでは、私と同世代のご夫婦が、乳癌の姉を十年以上心配されて来られたこと「寄り添いの意味をもっと学びたい」との思い、若い女性は「お茶の水メディカルカフェと読書会に参加したい」との思いを示して下さいました。

我が人生初めてのクルーズに、出港時、息子夫婦と8歳の孫が、送迎デッキの先端から見送ってくれました。20歳から続けている毎朝のジョギングも、15階の甲板で朝5時前から楽しみました。5月1日の朝は、右手に満月、左手に日の出という素晴らしい光景に感動。船員達とのフランクな英語での日常会話、クルーズが病みつきになりそうな予感です。



思い出に残った船旅

カウンセラー 津原 豊子

楽しい4泊5日のクルージングでした。ゴールデンウィークに樋野先生と共に船上で「がん哲学カフェ」を開催するという事で躊躇することなく参加。「良かった！」の一言です。

① 英国船籍の「ダイヤモンド・プリンセス」(11万6千トン、290m)…レストランや部屋位置を覚えた頃には下船。食事もフリーで豪華でした。

② 樋野先生の話は、いつもの樋野節でボソボソ(失礼!)でしたが、人間味あふれる話し方・温かさ。

二回の講演は出席された方々の心に響いたようです。私も何度か先生の講演は聴いているのですが船上では心新たでした。

③ 星野先生の強いリーダーシップで仲間の方々と打ち解け、親しいお交わりが出来た事は感謝でした。特に樋野ジーン夫人の「内助の功」で、今日の樋野興夫氏があることを痛感。これからも「がん哲カフェ」を拡大していきたいと思えます。

かけがえのないひととき

常盤台教会カフェスタッフ 岩崎 秀子

『ダイヤモンド・プリンセスで航くゴールデンウィークショートクルーズ&世界遺産姫路城5日間』の思い出…、人生初のクルーズの旅は、全ての日程が充実した最高に楽しい時間でした。

『ダイヤモンド・プリンセス号』は全長290m・乗客定員2,706名でその船の大きさは圧巻でした。28日の出港は17時で、これは大きな船でしか味わうことのできない最高の景色でした。

樋野先生の講演会が2回行われ、船上での講演会・カフェを経験できたことは一番印象に残っています。

初めてがん哲学を知ったという方が多数いらっしゃり、大変興味を持ってくださったことは、今後のますますの発展を予感させる嬉しい光景でした。お手伝いさせていただいたことに心から感謝しています。

美味しいお食事・美しい夜景・楽しいイベント…、樋野先生ご夫妻、同行の皆さまと共に過ごした全ての時間は、かけがえの無いひとときでした。

言葉の処方箋に感謝！

生きがいくくりアドバイザー 牧野 ゆき子

私は、平成24年に佐久市クアハウスで第2回がん哲学外来コーディネーター養成講座を受講しその後は主に関西方面(ハンセン病療養所岡山県長島愛生園2回、大阪、神戸、京都、東京各1回)でのメディカルカフェに参加させていただいてきました。その動機は、樋野先生を全面的に支える広報担当の星野昭江さんの情熱に惹かれたからです。この度のクルーズ乗船を決めたのも同じ理由からでした。

船内では樋野先生ご夫妻のおだやかな笑顔に終始包まれ将に言葉の処方箋に浸り、癒され、満たされた5日間でした。洋上がん哲学カフェについては、広すぎる船内での呼び込み不十分にもかかわらず樋野先生ご講演聴講者数は2回で約100名余り、時間不足を感じました。カフェ参加者の中には、「私は樋野先生のファンで日頃ご著書を沢山読んでいたのですが、この船に乗船されることは知らなかったです」と。

クルーズ同行の樋野先生始め皆様方とはお互いが素になり交流を深められ、「清き心」について深く考える機会を得た旅でもありました。

「寄り添う」ということ

小諸市市民 星野 直人

数回、がんが疑われて生検も体験した。が、なるようにしかならないと思って日々を暮らしていたら「がん」の方がどこかに行ってしまった。そしていつの間にか「がん哲学活動」の関係者を車で送迎したり、「あたまかず」の補充などの役回りをさせてもらっている。

洋上での樋野先生の講演会とカフェ開催では来客の会場案内をしながら、幼女と象が並んでいる絵を遠望した。一見して巨大な象と女の子の対比はアンバランスである。が、よく見ると女の子が象に何か働きかけている。これは余計なお節介だろうか、偉大なお節介なのだろうか。すると講演会会場から樋野先生の「寄り添う、支える」という言葉が聞こえてきた。耳を澄ました。察するに小さな女の子が巨象を支えることは無理である。しかし寄り添う事はできる。そういう意味だろうと思って聴いた。

船客のひとりが自分の体験談を話していた。「相手の心に軸足を置くこと、寄り添うことはなかなか難しいことですね」と。

ジーン夫人と英会話が出来て何よりの船旅だった。



第2回「クルーズセミナー」の実現を！

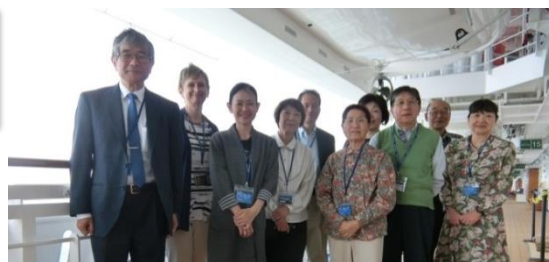
クルーズバケーション 高橋 謙三

今回、産経旅行社さんとのご縁により樋野先生が講演されるクルーズを企画・実施させて頂くことができました。樋野先生と打ち合わせを重ねて参りました。

正直、不安も大きかったのですが、2回の講演、そしてカフェに多くの皆様にお越し頂き、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。樋野先生がお話しされるテーマはすべての人が共感できるものと感じました。

旅行会社の営業担当者として樋野先生とお会い出来てそして添乗員として同行でき、幸運です。星野先生ご夫妻や参加者の皆様方とも一緒出来て光栄です。

次回のお話しをするのは恐縮ですが、もし叶うことが出来るのであれば、第2回クルーズセミナー&がんカフェが実現出来たら大変嬉しいです。また、みなさまと一緒にできる日が来ますことを祈っています！



編集後記 がん哲学外来市民学会広報 星野昭江

樋野先生から最初に記念クルーズのお話があったのは昨年8月だった。早速日程に書きとめたのだが、ほどなく中止というメールが来て、がっかりした。

再度、クルーズが決定したという募集広告ちらしが無い込んだ。夫と一緒にピースボート56日間オセアニアクルーズ(2018/01/08~03/04)の乗船間際であった。急いで申込金を払い込み、正月明けの横浜港に駆け付けて、ぎりぎりセーフ!であった。

今回の樋野先生の洋上講演会&カフェは予想以上の集客と船客から深い関心を持たれて盛会であった。

まさに、終わり良ければすべて良し!である。